

序 章

第1節 研究の目的・意義

1. 研究の目的

この研究の目的は、『婦人之友』誌という一つの資料の分析をとおして、①大正期を中心とするデモクラシー期の都市の「中流住宅」の住生活の実態をあきらかにし、②都市「中流階層」の「主婦」たちの住居観をあきらかにすることによって、生活者がこの時期の住様式の変容過程にどうかかわったかを考察することである。

2. 研究の背景

(1)「中廊下形（型）」住宅様式と「居間中心形（型）」住宅様式の融合

明治20年頃からの住生活の洋風化には、めざましいものがあり、上流階層では外国人技師の手になる洋館住宅をもつものもでてくる。洋館住宅は、はじめの頃には煉瓦造や石造が主流であったが、しだいに広まって明治時代中期には木造の洋館住宅も建てられるようになる。

そして、明治時代中期以降には伝統的な和風住宅の改良の問題についての議論がおこっている。雑誌や新聞などに、洋風住宅と比較しながら、和風住宅の問題点を述べたものがみられるようになる。①日本の伝統的住宅は、客間に重きをおいているが、家族の常住の場である居間や台所を重視すべきである ②部屋の通り抜けを廃止すべきである ③洋風の文物の影響を受けて、服装や住まいの起居様式が二重になっている 腰掛けを用いるべきである などの点が指摘されている。

やがて、都市につとめ人層が増えてくると、彼らは都市「中流階層」という一つのあたらしい階層を構成するようになる。経済的には決して裕福とはいえないが、比較的知的レベルの高い都市「中流階層」の人たちは、洋風のあたらしい生活に強いあこがれをいだき、合理的な生活を求め、好んで洋風を取り入れていく。生活の洋風化への関心は急速に広ま

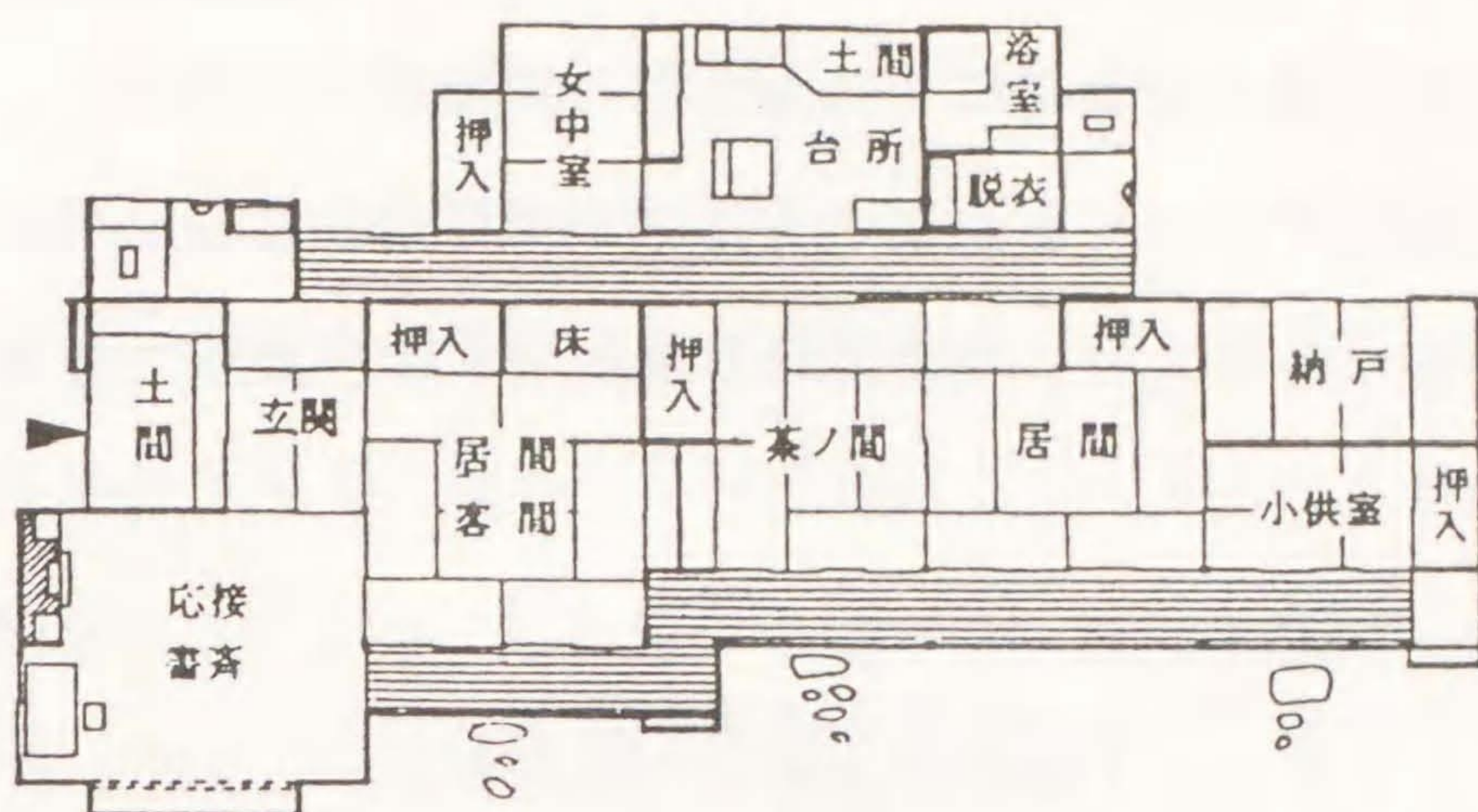
り、住生活の面でも活発な議論が展開されるようになる。都市の「中流階層」の人たちを対象にしたあたらしい住宅も積極的に提案される。『建築雑誌』にも、「和洋折衷住家」と題して「中流階層」向けの住宅が提案されたり、オーストラリアの軽便な住宅が紹介されたりもする。アメリカから直輸入した組立住宅を販売する住宅専門店「あめりか屋」も開店される。「あめりか屋」の店主橋口信助は後に「住宅改良會」を組織し、機関誌『住宅』を発刊する人物である。

大正時代に入ると、都市の「中流階層」の人たちを対象にした住まいについての議論はますます活発になり、住宅博覧会や、設計コンペも頻繁に催されるようになる。おもなものをあげると、文部省主催の「生活改善展覧會」(1919)、「平和記念東京博覧會」(1922)、阪急桜ヶ丘の「住宅改造博覧會」(1922)、日本建築協会の「改良住宅圖案懸賞競技設計」(1921)などの他、報知新聞や大阪朝日新聞社や住宅改良會主催のコンペ(1915～1919)などである。

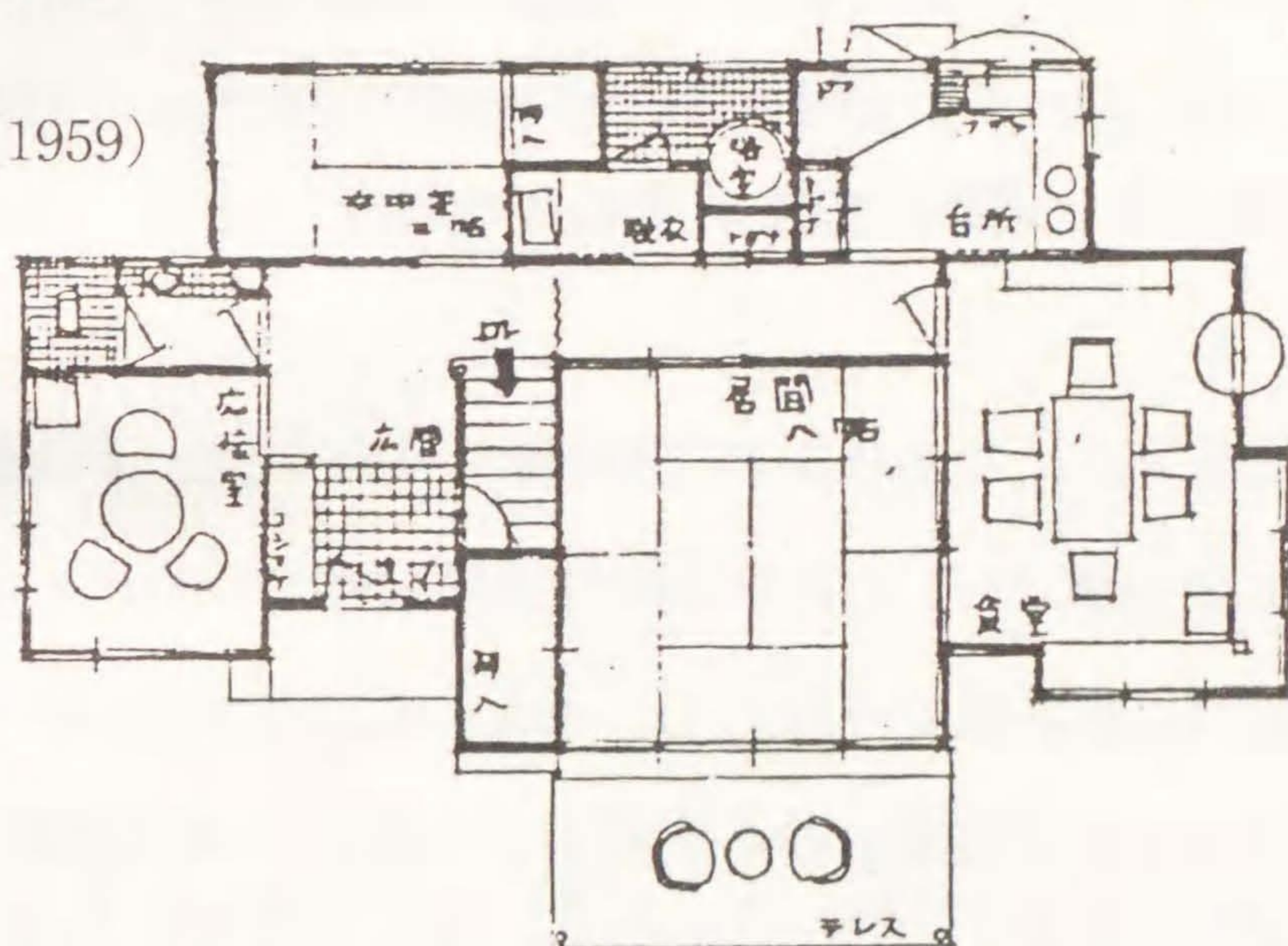
この時期の住宅様式の変容過程を、木村徳國が多くの資料を駆使して克明に分析し、『日本近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する史的研究』(1959)としてまとめている。この論文は、住宅はもともと「家屋」と「生活」の複合体であり、住宅を歴史的にみていくためには、家屋形式だけではなく、住宅様式概念を確立することが大切であると指摘し、住宅様式の発展のプロセスに、住宅観＝生活思想が大きくかかわっていることを具体的に示した大論文である。

その論文のなかで、木村徳國は1916(大正5)年に「中廊下形(型)」住宅¹⁾様式が成立し、1922(大正11)年に「居間中心形(型)」住宅¹⁾様式が成立したが、1931(昭和6)年頃に、この両者が融合する²⁾と述べ、融合の理由については、当時「中廊下形(型)」住宅様式は「住み良き」住宅様式として、「居間中心形(型)」住宅様式は「ありたき」住宅様式として存在していたので、「両住宅様式の普及に伴う『様式の弛緩』」³⁾により、融合するのは当然のことだと説明している。融合型の住宅の平面図は、図 0-1 に示すとおりであり、一部に洋風を取り入れているとはいえるものの、平面図の型としては、「中廊下形(型)」住宅様式に近いものである。「居間中心形(型)住宅」様式が「ありたき」住宅様式として存在しながら、普及・定着しなかったのはどうしてだろう、と考えたのが筆者の素朴な疑問であり、この研究への出発点であった。

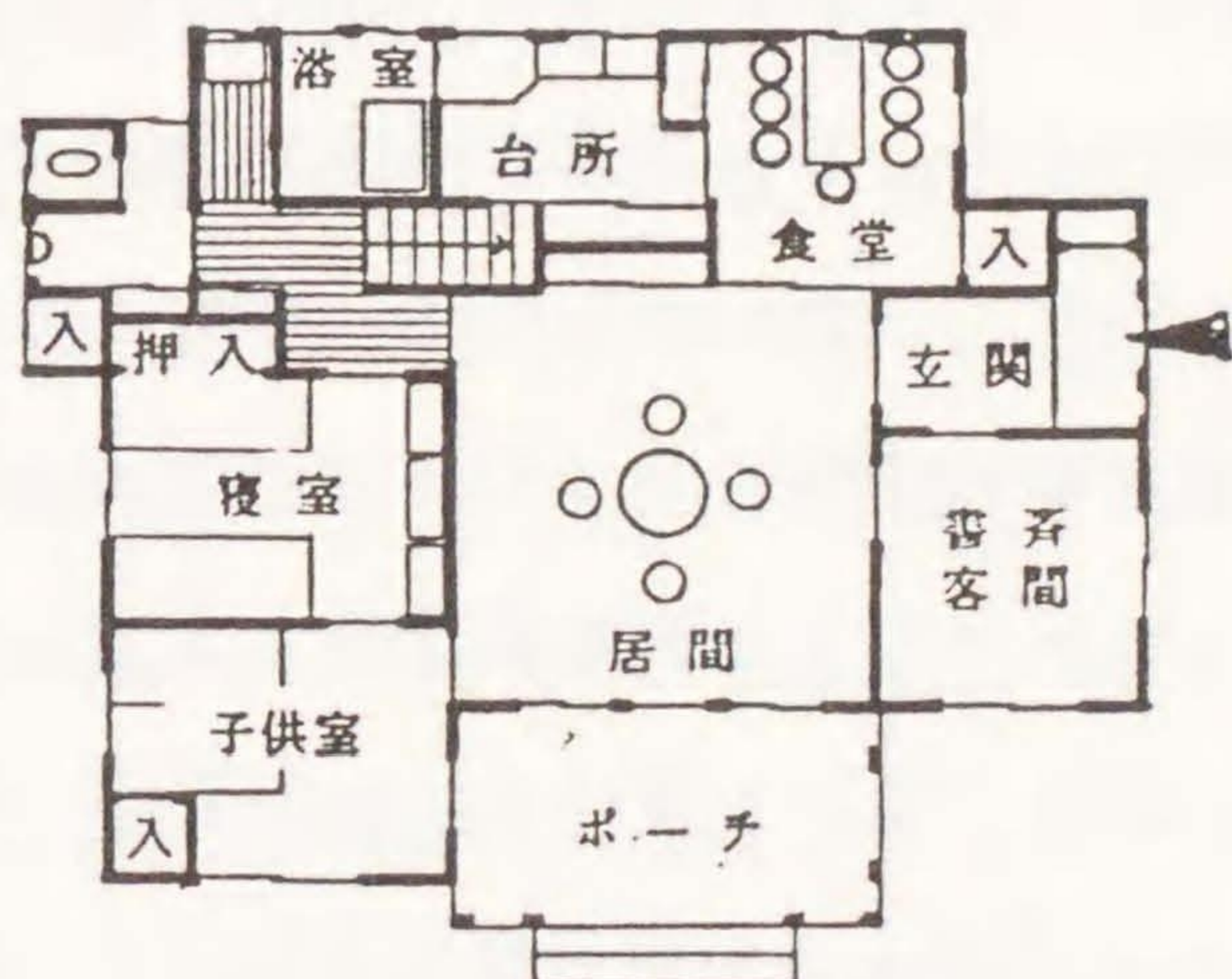
その後、西山卯三が、さらに多くの資料を重ねて、日本の住まいの歴史を描き出した⁴⁾のをはじめ、最近では、内田青蔵、町田玲子などが、わが国の近代住宅史の成果をあげて



大正6年「住宅」競技設計3等案
木村徳國 明治時代の住宅改良と
中廊下形住宅様式の成立
北大工学部研究報告,21,140(1959)



同潤会競技設計入選案 J-5号
木村徳國 昭和初期における中廊下形・居間中心形住宅様式の展開と融合
北大工学部研究報告,20,127(1958)



東京平和博覧会 生活改善同盟会出品
木村徳國 大正時代の住宅改良と居間中心形住宅様式の成立
北大工学部研究報告,18,142(1958)

図 0-1 「中廊下型」住宅様式・「居間中心型」住宅様式の成立と両用式の融合

木村徳國 日本近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する史的研究(1959)より作成

いる。しかし、「居間中心形（型）」住宅様式がそのままのかたちでは定着せず、昭和時代初期以降も「中廊下形（型）」住宅様式を基本にした融合型の住宅様式が定着し、それが現代の住まいにも大きく影響を与えている、ということは現在では定説となっている。内田青蔵も「あめりか屋」の商品住宅を中心に、西洋館の和風化という視点でまとめている⁵⁾。

「中廊下形（型）」住宅様式と「居間中心形（型）」住宅様式は、いくつかの点でまったく異なる構成論理をもっており、それらが「様式の弛緩」で融合するという考え方には、筆者は納得することができず、この時期の住様式の変容過程を毎日生活している生活者の住居観と関連させて考察したらどうなるかと考えた。

(2) 住様式の変容過程への生活者のかかわり

与謝野晶子が、たからかに“山の動く日^{きた}来る”と、『青踏』創刊号の巻頭をかざった(1911年9月1日)頃には、文学や芸術の世界だけではなく、日常生活の面でも封建的なイエ制度にもとづく家庭像をみなおし、あたらしい生活様式を求める女性たちの声が昂まっていた。都市の「中流階層」の「主婦」たちは、日本の気候風土に根ざした伝統的な生活様式を大切にしつつも、洋風の生活に強いあこがれをいだき、積極的にこれを取り入れようとした。大正時代に入ると、多くの展覧会や博覧会などが開催され、専門家による活発な議論が展開され、反封建的な家庭像が描かれ、あたらしい住宅や生活用具などが提案された。彼女たちは、専門家の議論や提案を歓迎をもって受けとめ、好んであたらしい生活を求めようとしたので、大正時代から昭和時代のはじめにかけて、住生活の改善も大きく進んだ。伝統的な和風住宅の玄関脇に洋風の応接室をもつ和洋折衷住宅が目を引くようになり、立ち働きのしやすい台所も研究される。しかもこうした一つひとつの実践的な住生活改善が個人のレベルにとどまるのではなく、新聞や雑誌にもとりあげられ、社会的な関心として注目されるようになったのである。ここに、この時代の特徴がある。橋口信助も、「住宅改良會」の機関誌『住宅』の発刊にあたって、「主婦層も讀める家庭雑誌の香りのする住宅専門雑誌」と述べており、生活者の日常生活に根ざした実践的な体験を大切にした議論が求められていたことがわかる。

3. 研究の意義

ところが、この時期の住宅様式の変容過程に関する研究としては、専門家の論文や図集、競技設計や博覧会や展覧会などの作品を分析した報告が多く、実際に生活者が住み方や住居観をもふくめて住様式の変容過程にどうかかわったかという点に関する報告はあまりみられない。しかし、この「中廊下形（型）」住宅様式と「居間中心形（型）」住宅様式との融合のプロセスは、①専門家の理論や作品が生活者におよぼす影響と、②実際の住み方や生活者の住居観、の面から、さらにあきらかにされる必要がある。なぜなら、①住宅は建築のなかでも専門家の理論だけではなく、実際に生活するものの住み方や住居観によって発展するという性格が強く、実際にこの時期には生活者の積極的で主体的なかかわりがみられるからであり、②この時期は、専門家の理論や作品が、層としての生活者に影響をおよぼしはじめた時期だからである。

第2節 研究の方法

1. 分析対象年代

分析対象年代は、大正期を中心とするデモクラシー期とした。具体的には『婦人之友』誌創刊の1908(明治41)年から1934(昭和9)年までの27年間である。

通常、政治経済的には日露戦争の終わった1905(明治38)年から護憲三派内閣による諸改革の行われた1925(大正14)年までの21年間を、大正デモクラシー期と呼んでいるが⁶⁾、本研究では政治経済というよりも、都市「中流階層」の住生活をみることがおもな目的であるから、1925(大正14)年を経て、文化的高揚が生活の中に定着していく1934(昭和9)年までを分析対象年代とし、この期間を大正期を中心とするデモクラシー期と呼ぶことにする。

この期間を分析対象年代とした理由については、つぎのとおりである。

第1の理由は、本研究の主要な課題である『婦人之友』誌読者の住居観、なかでも家族の日常生活の快適性を何よりも重視するという家族本位志向は、いわゆる大正デモクラシーと呼ばれる文化的高揚を背景に形成されたものだと考えるからである。

大正期を中心とするデモクラシー期は、(平塚)らいてうが青鞥社を結成し、『青鞥』創刊号を発刊(1911年9月1日)した時代であり、帝劇で文芸協会がイプセンの「人形の家」を公演(1911年9月22日)し、社会の反響をよんだ時代である。夏目漱石、國木田獨步などの市民的文学がおこり、武者小路實篤や志賀直哉、有島武郎らの白樺派が全盛期を迎え、高村光太郎や萩原朔太郎、室生犀星らが口語自由律詩の新風をおこしている。画壇では横

山大観や下村観山の日本美術院（再興），土田麦僊^{ばくせん}や小野竹喬らの国画創作協會などが文展に反旗をひるがえし，洋画家の岸田劉生や中村 彝^{つね}らが活躍している時代である。自由でたのしい童話や童謡を満載して児童文化に大きな影響を与えた『赤い鳥』も発刊(1918年7月)され，学校教育の面でも子どもの個性を活かそうとする自由な教育が叫ばれ，私立の学校もつぎつぎと生まれている（たとえば，成城小学校(1917年：澤柳政太郎)，自由学園(1921年：羽仁もと子・吉一)，文化学院(1921年：西村伊作)，池袋児童の村小学校(1924年)，明星学園(1924年：赤井米吉)など）。学問の世界でも，哲学者西田幾太郎や歴史学者津田左右吉や民俗学者柳田國男の独創的な学問の骨格ができあがっている。こうした文化的な高揚に加えて，普選運動，婦人参政権の運動，労働争議や小作争議や米騒動などをとおして，多くの民衆が政治に直接かかわろうとしていた時代である。そして何よりも，上述した文化的な高揚や多くの民衆的な運動が日常生活のすみずみにまで影響していた時代である。『婦人之友』誌読者の家族本位志向は，このような文化的高揚や民衆的な運動が日常生活のすみずみにまで影響していたという時代的な背景のなかでこそ形成されたものである。

第2の理由は，研究資料としてとりあげた，この時期の『婦人之友』誌の記事の内容に，あたらしい家庭生活像を求めようとする読者の息吹のようなものを感じるからである。第2章で詳しくみるように，創刊以来1934(昭和9)年ころまでの『婦人之友』誌の記事には，封建性をみなおし，合理的な家庭生活を求めようという読者の燃えるような想いが伝わってくるものが多い。ところが，それ以降のものは，しだいに戦争色を帯びるようになり，生活のこまかな工夫に終始するものが多くなる。新しい生活を創造していこうという，生き生きとした『婦人之友』誌読者の姿勢を大切にしながら論をすすめていきたいからである。

そして第3の理由は，わが国の住宅改善運動がこの時代に盛り上がりを見せ，昭和時代に入ると衰退しはじめることである。第3章で詳しくみるように，明治時代のおわりから大正時代のはじめにかけて，木に竹を接いだような折衷ではない，真の和洋折衷を求めようという議論がおこりはじめ，多くの博覧会や展覧会，「住宅改良會」や「生活改善同盟會」の活動などをとおして，あるいはまた学校教育の場や女性雑誌などをとおして，住生活改善の気運が盛り上がった。関東大震災の震災復興のために設立された同潤會も，庶民の要望の強さに支えられて，多くの分譲住宅を供給することになる。しかし，こうした住生活改善の動きも昭和時代に入ると衰えていく。

これらの理由から、本研究では分析対象年代を大正期を中心とするデモクラシー期とした。

年代をあらわすのには、西暦を用い、必要に応じて()内に元号を記した。

資料の引用文は、対象としている年代が明治時代のおわりから昭和時代のはじめまでであり、現代文に近く比較的わかりやすいので、原則として原文のままとした。

2. 分析対象—都市「中流住宅」

大正期を中心とするデモクラシー期に、住様式の変容過程に生活者がどうかかわったかという点を考察するのに、分析対象として都市の「中流住宅」を取りあげたのは、つぎの2つの理由からである。

第1の点は、都市の「中流住宅」に居住する人々は、上流階層の住生活にあこがれつつも、経済的な制約からすべての要求を満たすことができないので、かえって、その住要求がより切実で、より緊急性の高いものという視点で精選されているということである。

第2点目は、その後の歴史的な経過からみて、この当時の都市「中流住宅」の住様式が、現代の住生活に直接に大きな影響をおよぼしているという点である。

西山卯三は、この時代の都市の「中流住宅」について、「『中流住宅』は、直ちに『中産階級』あるいは『中流階級』の住宅であるとはいえない。それぞれの間に幾分のズレがある。しかしいわゆる『中産階級』『中流階級』というイメージとはなはだ似通っていて、ある点ではピッタリとダブっていることも事実である。『中流住宅』とは『健全な中産階級』的住宅で、ぜいたくではなく、また貧しさで手のほどこしようもないというのではない、健全で中庸の、したがって最も注目と追求に値する住宅である—というふうに意義づけられようとしてきたが、その実体は、『上流』をのぞみ、それを追っかけようとする。しかしその貧しさのために、許される『ぜいたく』の限界がある故に、全幅的にそれを真似えない。したがってつつましく何程かを部分的に真似ることで満足してゆこうという、身体は下にあるが目は上を向いている（それこそ「中流住宅」のイメージそのものである）住宅であるといえる」⁷⁾と定義している。

そしてさらに、「日本の住宅階層の中で、国民の大多数が閉じこめられている都市の細民住宅、長屋・アパートなどといった、しばしば人間らしい生活が否定されているような

ものではなくて、この層の住宅は大邸宅追隨の姿勢が強く、それによって色こくひずめられているけれど、狭小・低質の一般庶民住宅ではとりくみえないいろいろな試みが積極的になされてきたことである。それは将来の国民諸階層の住宅改善について学ぶべき経験や成果をつみ重ねてきている」⁷⁾として、この時代の都市「中流住宅」を「現代住宅の祖形」⁷⁾と位置づけている。

3. 分析資料－『婦人之友』誌

都市の「中流住宅」の住み方と住居観の実態を分析するのに、資料として『婦人之友』誌をとりあげた。このことについては、すこし詳しく検討を要するので、別に第1章として、『婦人之友』誌の資料的価値の検討の章を設けた。

注および引用文献

- 1) 鈴木賢次（日本家政学会編、家政学事典、朝倉書店、790～791(1990)）によれば、「中廊下形（型）住宅」，「居間中心形（型）」住宅と命名したのは、木村徳國だとしているが、木村徳國の表題論文では、それぞれ「中廊下形住宅」，「居間中心形住宅」となっている。
- 2) 木村徳國，北大工学部研究報告，21，4～12(1959)によれば，中廊下形（型）住宅の社会的な成立は1916年，居間中心形（型）住宅様式は，1922年の東京平和博住宅展示会（14棟），大阪桜ヶ丘住宅の展示会（10数棟）によって完成し，その後中廊下形（型）住宅と居間中心形（型）住宅はそれぞれ「住み良き」，「ありたき」住宅様式として存在していたが，1931～32年頃に融合するとしている。
- 3) 前掲2)20
- 4) 西山卯三，日本の住まいⅡ，勁草書房(1976)
- 5) 内田青蔵，あめりか屋商品住宅，住まいの図書館出版局(1987)
- 6) 国史大辞典編集委員会，國史大辞典，吉川弘文堂（1987）によれば，「大正デモクラシーの定義は「日露戦争後から大正末年にかけ，政治の世界を中心に，社会・文化にまで顕著にあらわれた民主主義的，自由主義的傾向」とされているが，大正デモクラシーという用語は，信夫清三郎の『大正デモクラシー史』（1954～1959）以来広く使われるようになり，1960年代から1970年代にかけて実証的研究が進んだが，①定義がいまいである ②デモクラシーが時代の主潮流ではない ③内容がデモクラシーの名称に適合しない，民本主義と呼ぶべきであるなどの理由から，未だ歴史用語としては使用すべきではないという見解もある。1980年代に入り，政治権力構造および，民衆運動とその統合過程についてのより精密な研究が進みつつある」ということである。
- 7) 西山卯三，前掲4)45～46